若越郷土研究
42の2

裏方のひと―北野博美伝①

内海　宏隆

1　はじめに

折口信夫の読者／折口学の研究に携わるものにとって北野博美の名を直接目にするのは『古代研究』の「追ひ書き」ならびに全集各巻末の「あとがき」の箇所においてである。北野は「翁の発生」以下（後のち折口学を語る上で欠かすことのできないこととなる）数々の重要な初期論考の口述筆記を務め、自らが編集に携わった雑誌（主に『民俗芸術』誌上）に掲載した―云わば折口信夫を背後から支えた裏方のひと、影の功労者なのである。生涯にわたり論稿・原稿執筆に際して口述筆記というスタイルをとり続けた折口にとって秀れた筆記者・速記者・編集者の存在は必要不可欠のものであった。後年、折口は池田弥三郎のような優れた筆記者や石井順三のような秀でた編集者に恵まれたが、殊折口学形成期に至っては周辺にそうした能力を兼ね備えた人物というのは極めて稀であったのだ。その一人が他ならぬ北野博美であった。（註1）まもなく刊行予定の「迢空・折口信夫事典」（註2）より「北野博美」の項をここに引き、紹介したいと思う。

北野博美（きたの・ひろみ／明26・1・28～昭和23・3・7）

雑誌「民俗芸術」（昭3・1～7・9）「日本民俗」（昭10・8～13・8）編集者。日本民俗協会常任幹事。福井県福井市乾上町に生れる。父は福井藩士北野文蔵、母は維新の志士・儒学者「福井学問の権興」吉田東篁の女小あさ。本名文次郎。父親の事業の失敗で福井商業学校を中退。明治四十二年、従兄滝沢豊の世話で福井新聞社会部記者となるのち上京を志して旅役者の群に投じて、どさ回り。大正五年春甲府で興業中、糸繭商・広瀬慶次郎の娘千加と出会い結婚、雑司ヶ谷近辺に居を構える。近隣に住む秋田雨雀、田中王堂、菅原教造など作家・学者などの知己を得て大正七年より中村古峡主宰「変態心理」（大6・10～15・10）編集に携わる。（～大9・11）大正八年十月「性之研究会」を自ら主宰。「性之研究」創刊（大8・12～10・11　第三巻七号?）好評を博し南方熊楠・三田村鳶魚などの寄稿も得、「恋愛心理」「買淫研究」などの兄弟誌を刊行するも当局より「風俗壊乱罪」に問われること数回、終刊を余儀なくされた。大正十一年九月国学院大学で開講された折口信夫「万葉集三十三回講座」に出席以後折口学に傾倒す。昭和二年「民俗芸術の会」設立に伴い入会、同年十一月第三回談話会での折口の四時間にわたる発表「翁の成立」の口述筆記を担当、翌三年一月「民俗芸術」創刊号に「翁の発生」として掲載。『古代研究』の論稿のうち六編は北野の手になる。筆跡が彼の人と酷似し作文・編集能力に長け

ていたため本人も知らぬうちに講義や講演を折口名義で発表したものも多い。小寺融吉とともに「民俗芸術」を運営したが経営困難となり終刊。個人雑誌「年中行事」刊行（昭8・5～10・4　昭48臨川書房より復刊）、折口学の弘通に努めた。昭和十年八月、日本民俗協会発足、「日本民俗」編集ならびに日本青年館「郷土芸能と民謡の会」の企画者・推進役として活躍。日本民俗協会解散ののち昭和十四年皇民協同党（のちの皇民実践協議会）中央委員となる。「興民新聞」編集に就き昭和十六年「民俗芸術の会」再開を試みる。以後時局切迫の中でも独自に談話会などを開催。昭和二十年病（結核）を得て没年まで長期療養生活。清瀬市信愛病院にて死去。駒込西ケ原の曹洞宗昌林寺の珊瑚樹の根元に福田政雄らの世話で埋葬される。北野没後、折口は追悼記念講演会や「北野祭」などを催して故人を偲んだ。（内海宏隆）

折口学の弘通はもとより日本民俗学の勃興期から興隆期にかけて北野の果たした役割は決して小さなものとは云い難く、この福井出身の埋もれた学匠を発掘し顕彰することは極めて意義のあることと思われる。しかし北野博美について知る人は決して多くない。まとまった伝記らしいものもほとんどなく、折口信夫の高弟で国学院大学の教授であった高崎正秀（明治34年10月19日―昭和57年3月2日）が昭和34年「日本民俗学大系7」の巻末付録「民俗学に寄与した人々」に執筆した「北野博美年譜その他」（以下「高崎年譜」と略称）が唯一あるのみである。がこれとても不明な点が多く私は「迢空・折口信夫事典」「北野博美」の項の執筆に伴い、この「高崎年譜」をベースにした数々の検証作業を行わねばならぬはめに陥った。まさに「陥った」のであって、未だにそこから抜け出られないでいる。それはとても筆者一人の手に負えるような簡単な為事ではなかった。以下の文章は、北野博美の生い立ちから青春時代にかけて（主に郷里・福井での出来事について）私が行った検証作業（とも呼べぬような拙い為事）の一端である。慚愧の念にかられつつも茲に掲載していただくのは他ならぬ北野の郷里である福井の先学諸氏に拙稿をご高覧賜り、ご教示ご鞭撻を仰ぎたいが故のことである。

2　検証作業①　謎多きルーツ

「高崎年譜」によれば《北野博美》は「明治二六年一月二八日、福井県乾上町（いぬいかみちょう・現在の乾徳町）に、福井藩士文蔵の長男として生ま」れたことになっている。まず、幕末福井藩に《北野文蔵》なる藩士が存在したのかどうかを確認する必要があろう。

『福井藩史事典』（註3）「2　身分・格式」の項を繙くと「15　江戸・在町・大阪・京都・他所出入用達人名　○在町」の欄に「三人扶持　北野橘右衛門」なる人物の名をみつけることができる。しかしこれは藩に出入りしていた「出入用達人」＝《商人》であって「藩士」の身分にあったものとは認めがたい。無論、この人物がのちに藩士として取り立てられた／北野文蔵の縁者であるという可能性が全くないとは言い難いだろうが、現在のところ明確ではない。次に『福井市史資料編4　近世』の「藩士給帳」をあたったが《北野》姓をもつものは結局発見できなかった。しかし「藩士給帳」に名前も記載され

ない「卒」と呼ばれる下級藩士が福井藩には二〇〇〇人ほどいたそうだから、≪北野文蔵≫もそのうちの一人だったのかもしれない。「高崎年譜」によれば「母方の祖父に…吉田東篁を持つ」ということなので「吉田東篁」の身分についても確認してみた。『郷土歴史人物事典　福井』（註4）によれば東篁の「父親（筆者注・の名）は金八で藩の軽輩であった」とのことである。また『福井県事典』（福井新聞社）には東篁は「『鉈差』と呼ばれた下級藩士の出身」と記してある。「鉈差」の由来は「腰にナタをさして藩の竹ヤブを見まわって歩く」ことを仕事としていたことにある。（註5）金がなくて一人前に武士の魂と呼ばれるところの刀すら帯びられなかったという隠喩的な要素もあろうか。多数の者を罷免したり、予算などを大幅に削ったりする場合に用いる慣用句に「鉈を振るう」というのがある。彼ら「鉈差」と呼ばれた下級武士は急場の際「鉈を振るう」側ではなく「振るわれる」側、現在で言えばリストラで整理される余剰人員の対象にあったのではあるまいか。幕末とは言え、まるきり身分や格式の離れたり違った家同士が縁組するとは思えないので≪北野文蔵≫も「卒」「軽輩」「『鉈差』と呼ばれた下級藩士の出身」であったのかもしれない。のちに福井県庁県史編纂室のほうに問い合わせたが結局のところ幕末福井藩に≪北野文蔵≫なる藩士が存在したのかどうかは不明だった。≪博美≫にとって従兄にあたる滝沢豊の父忠七は東篁の四女小うめを娶ったことになっているが、滝沢家もまた貧しい下級藩士の出身であったことがわかっている（忠七は生来の怠け者で禄に働こうとしなかったため、妻の小うめが仕立て物を請け負ったり・英語の初歩を近隣の子供に手ほどきしたりして子供たちの養育費を稼いだということである。（註6）滝沢豊と≪北野博美≫とは従兄弟づきあいをしていたくらいだったから、滝沢・北野両家の境遇も似たり寄ったりのところにあったのではあるまいか。

次に「高崎年譜」の「母方の祖父に維新の志士、贈従四位吉田東篁を持つ」という記述についての調査結果を報告したい。吉田東篁については一般的な百科事典のレヴェルでは知ることはできない。前述した『郷土歴史人物事典』や『福井県大百科事典』などローカル色の強い「事典」に詳しいのでそれらをそのまま転載する。

吉田東篁　一八〇八～一八七五。福井藩儒。名は篤。字は士行。幼名は金一、通称は悌蔵（ていぞう）。東篁・蒙斎・紅湖散人などと号した。父親は金八で藩の軽輩であった。文政二年（一八一九）藩の学問所正義堂が「桜の馬場」（現福井市立旭小学校付近）に開設されたので入学し、藩儒の前田雲洞、さらに清田丹蔵（松堂）のもとで勉学に励む。ついで京都の鈴木遺音に私淑して、山崎闇斎の崎門学派に徹することとなった。嘉永六年（一八五三）のペリー来航により、かねて学問は単に理論ではなくあくまで実践にあると主張していた彼は、藩の重臣本多修理や鈴木主税（ちから）とともに江戸に出て、大いに国事に画策した。この際、水戸藩の藤田東湖にも会い議論を交わすうちに、肝胆あい照らす仲となった。しかし彼の母が乳がんで橋本左内の手術を受けることになっ

たので、翌安政元年（一八五四）帰藩した。翌二年、藩校明道館が開かれると助教に任ぜられ、教学の振興に尽力した。同四年二月、彼はいったん辞職したが、同六年からは再び明道館教授兼侍講として、明治元年（一八六八）まで藩士の子弟の教育にあたった。一方その間、藩政や中央政局の重要課題についても、しばしば意見具申するなど、政治的問題の強さを示した。ところで彼は正義堂で学んだ後、「桜の馬場」の自宅で私塾を開いたが、門人のうちからは、鈴木主税・橋本左内・由利公正らの改革派の中心人物を輩出させており、福井藩主松平慶永からも「福井学問の権興（創始者）」と評されたほどであった。

（以下略）

『郷土歴史人物事典　〈福井〉』

吉田東篁　文化五年（一八〇八）八月一日―明治八年（一八七五）五月二日　（中略）福井藩の下級武士の「鉈差し」と俗称された身分に生れ、初め崎門学派の清田丹蔵に学び、また京都に出て鈴木撫泉に就学した。嘉永六年時勢に感じて江戸・京都に遊び、藤田東湖・藤森弘庵・梅田雲浜・梁川星巌らと交わった。安政二年藩校明道館が創立されて助教となったが、横井小楠が聘せられて賓師となるに及び、これと論合わず職を去り、私塾を開いた。その薫陶を受けたものに鈴木主税・橋本左内・由利公正・矢島立軒・本田修理らがあった。ついでまた助教兼侍読に任ぜられ、子弟の育英に精励した。明治初年辞職、自適の生活に入った。年六八で没。

『明治維新人名辞典』（註7）

吉田東篁　1808～1875（文化5～明治8）福井藩儒学者。福井城下に生まれる。名は篤、通称は金一・悌蔵、東篁のほか蒙齋・紅湖山人などと号した。「鉈差」と呼ばれた下級藩士の出身であったが、幼年期より学問に志し、はじめ清田丹蔵、のち京都の鈴木撫泉に学んで崎門派の儒学を修め、藤田東湖・藤森弘庵・梅田雲浜等と交流した。福井に私塾を開き、その門下から鈴木主税・橋本左内・矢島立軒等の人材を輩出するなど、一藩を風靡する勢があった。藩校明道館の教官に登用されたが、横井小楠と論合わず、一時職を去った。のち明道館助教兼侍読に進み、多くの藩士を薫陶した。《伴五十嗣郎》

『福井県大百科辞典』

これらの記述の中心はどれも吉田東篁の社会的な部分での評価にある。「鈴木主税、橋本左内、由利公正らの改革派の中心人物を輩出」し「福井学問の権興」と藩主自らより呼ばれたあたりに彼の人生のクライマックスがある。「高崎年譜」によれば《北野》はこの「祖父」「を持つことを誇りとして終生行動した」そうだ。《北野》が後に折口信夫との出会いによって当時の新興学問であった民俗学に強くひかれてゆき、「折口学の弘通」に努めたというのも「福井学問の権興」と呼ばれた「祖父」吉田東篁の影響によるものが大きかったのではなかったか。しかし残念ながらこれらの伝記からは東篁の（たとえば結婚や子女誕生といった）プライヴェートな部分は伝わってこない。「東篁は妻〇〇と何年に結婚し、その間に〇人の子をもうけた。長女〇〇《生没年》、長男〇〇《生没年》…がいる。」「東篁の〇女〇〇は福井藩士北野文蔵に嫁いだ」などという我々の最も期待する記述は一切見られないのだ。前出・「ふくい百年の人人」にしてようやく「彼の妻は十人の

子（二男、八女）を生んだが男の子はいずれも小さいとき死んだので、おいの謹夫をあとつぎとし、自分は山守（やまがみ）東篁と名乗って、ゆうゆう自適した」という記述をみつけることができるくらいだ。しかし「彼の妻」「十人の子」の名前は明らかにされていない。北野家が吉田家と親戚関係にあり、そこには文次郎と呼ばれる人物がいたという事実をなんとしてでもつかまねばならない。そこで「高崎年譜」の別の箇所「従兄滝沢豊」なる人物からアプローチをかけてみることにした。《滝沢豊》と《北野博美》とが従兄弟関係にあるとすればひょっとして現在も滝沢家と北野家は関係が続いているかもしれないと考えたのだ。これは偶然のことだが《北野》の出身校とおぼされる福井商業学校（現在の県立福井商業高等学校）に確認をとっている際に、同校の校史編纂に携わっておられる松田平男先生より滝沢豊さんのご子孫が現在では福井市内で文房具商を営んでおられることを教えていただき問い合わせてみたのである。窓口になっていただいたのは滝沢豊の長女隆子の養子穆（あつし）さんに嫁がれているさだ子さん（昭和四年六月八日生まれ）である。（穆さんは平成元年に他界されている。）

結論から先に申し上げれば私のあたった範囲ではさだ子さんはじめ滝沢一族ならびに吉田東篁のご子孫のみなさんで《北野家》の存在をご存じの方は最初誰一人としておられなかった。但し《文次郎》という名前を耳にしたことのある人は何人かいることがわかった。現時点で《北野博美》を吉田東篁一族・の累として認める（に組み入れてしまう）ことに若干のためらいがないわけではないが、一応現在までの調査の過程を説明しておきたいと思う。

滝沢さだ子さんより話を伺い、更にご親戚の方お二人を紹介いただいた。吉田東篁の次女の流れを組む田渕薫さん（大正元年10月生まれ）と加藤實さん（大正4年2月21日生まれ）のお二人である。加藤實さんのお話しだと東篁には六人の娘がいたそうである。長女（名前不明）は岡田家（医者）へ嫁いだので次女のゆりが吉田家を継ぐことになった。次女ゆりは養子秋水と縁組し、長男元（はじめ）を産んだ。長男元は四人の娘を設けた。長女翠・次女節は早世し、三女薫は大阪の田渕家に嫁いだため、吉田家のことは四女である實さんに任せられたそうなのである。（實さんも加藤家に嫁いだので現在東篁の子孫で吉田姓を名乗るものは一人もいなくなったわけである。田渕薫さんは何も覚えていないし、家のことは妹の實さんにすべて任せてあるとおっしゃっていた。）三女についてはその娘小熊が斎藤家に嫁いだということしか分からず、四女小うめについては前述したとおりである。六女小竹は次女ゆりとたいへん仲がよく嫁入り前にゆりの家で一年ほど生活したこともあったというし、のちに増村家に嫁ぎ台湾にわたったそうだが、帰国の折は必ず二姉ゆりを訪れたそうである。

しかし、林長孺撰「東篁山守君碑」には左記の記載がある。

娶高橋氏。生二男八女。二男與第二女第五女皆夭。乃乞養岡田信次子謹夫為嗣。配第三女矣。第一女。第四女。適士族岡田某。末松某。第六女以下未嫁。（『東篁遺稿』山口

若越郷土研究　四十二巻二号

透・編輯発行　臺灣日日新報社　大正12）

加藤實さんは「東篁には六人の娘があって」と語られたが、実際のところは男二人女八人計十人の子が生まれたけど、そのうち男子二人と女子二人が早世したため女児六名が残ったというのが真相らしい。

後日、加藤實さんより「祖母・ゆりの伴侶の名『秋水』は雅号であり、本名は謹夫といった。これは岡田家から来た人である。」と伺った。これは「東篁山守君碑」にある「岡田信次子謹夫」に相当する。加藤さんが東篁「二女」とするご先祖は「東篁山守君碑」によると「第二女第五女皆夭」のため繰り上がっての結果であり、実際は「三女」だったようだ。

同じように滝沢さだ子さんが東篁「四女」とするご先祖・小うめは「六女」となる。

おそらく「末松某」に嫁した「第四女」が、小熊の母（伝「三女」）に相当する人であろう。

東篁の末娘（第八女）が小竹である。そうすると全く情報のない第七女が北野文蔵に嫁いだことになる。（「東篁山守君碑」には「第六女以下未婚」とあり、この碑が建立された時点では第六女以下の婚姻先は不明。）

東篁から数えて現在の子孫たちは四世・五世に相当する。が、こうして情報収集してみると系譜のほぼ全体像は明らかなものとなる。一方で第七女についてのみ全く情報がないというのはいかなることであろうか。全く子孫たちの記憶から第七女に関する情報が欠落してしまっているというのにはなにやら訳がありそうに思えてくる。

（この稿続く）

註

1　詳細については拙稿「裏方のひと―北野博美と折口信夫―」『芸術至上主義文芸』（第22号96・12）を参照されたし。なお、本稿の内容を継ぐものとして「北野博美の大正時代―折口信夫への遥けき道程」（未発表稿）「北野博美と折口信夫―昭和初期の動向を中心として」『攻玉社中学高等学校研究紀要』（第3号　97・4）「北野博美の晩年―折口信夫とのわかれ」（未発表稿）があることを付け加えておく。

2　勉誠社より刊行予定。有山大五・馬渡憲三郎・石内徹編

3　鈴木準道著・舟沢茂樹校訂　歴史図書社　昭和52

4　印牧邦雄監修　第一法規　昭和60

5　青園謙三郎「ふくい百年の人人」『福井新聞』昭和42年11月6日付

6　滝沢さだ子さん・談

7　吉川弘文館　昭和56

（うつみ　ひろたか）